

桐材とのかかわり

瀬戸氏の作品は、抽象的な造形に^{ごふん}胡粉と呼ばれる白い顔料を塗った作品から、徐々に人形などのはっきりとした形で、桐材の^{きりざい}素地^{そじ}を活かす作風へと移っていきました。※1

制作で^{もっぱ}専ら用いた桐材と本人の関わりについて、著書の中で次のように述べています。

「私にとって桐の木との結びつきは、偶然とでも言うべきもので、実家が桐を^{あきな}商^{かぎょう}う稼業であったため、立木の買い付けから^き伐り倒し、^は皮を剥ぐ作業、乾燥、製材、加工、販売といろいろの作業を手伝わされたものです。」

瀬戸氏の実家は、現在の本町二丁目において^{はきもの}履物屋を営んでおり、履物の販売だけでなく、^{げた}下駄の製造も行っていました。幼い頃から桐材の加工が身近であった環境が、^{そうさく}創作^{したじ}の下地にあったと言えるでしょう。

※1 親族からの聞き取りによる